# 焼跡のイエス・処女懐胎

石川淳

新潮文庫

焼跡のイエス・処女懐胎

定価はカバーに表示してあります。

新潮文庫 草22A

昭和四十五年五月十五日 発行
昭和四十八年八月十日 七刷

著者 石川淳

発行者 佐藤亮一

発行所 株式会社 新潮社
郵便番号 一六二
東京都新宿区矢来町七一
電話東京(〇三)(二六〇)一一一一
振替東京八〇八番

乱丁、落丁のものは本社又はお買求めの書店にてお取替えいたします。

㊗ 印刷・光邦印刷株式会社 製本・大進堂製本所
© Jun Ishikawa 1970 Printed in Japan

新潮文庫

# 焼跡のイエス・処女懐胎

石川淳著

新潮社版

# 目次


葦手……七
山桜……六九
マルスの歌……八三
張柏端……一二一
焼跡のイエス……一三一
かよい小町……一三九
処女懐胎……一七五
変化雑載……二六七
喜寿童女……二八五
解説　佐々木基一


此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

# 焼跡のイエス・処女懐胎

葦(あし)

手(で)

# 一

神楽坂の肴町から矢来へ向うにぎやかな大通を途中で左へきれ、急にひっそりとする小路を縫って、一月なかばの夜の寒さに表を閉ざした家並のなかを下駄を鳴らしながら歩いて行くうちにそこだけは一軒硝子戸越しにぼんやり灯の色が流れている煙草屋の前に出ると、先に立った河本仙吉芸名清元卯太夫がぴたりと足をとめ、その明るみをおそれるように角袖外套の襟を深く立てながらふり返って長身をかがませ、「え、喬さん。」と声をひそめて、「ここだよ、この奥なんだよ。」仙吉のあごでさしたのは煙草屋の角をまがる狭い路地の闇で、いっしょにのぞきこんだわたしの眼にはただ暗いばかりで見当もつかなかったが、じっと瞳を定めるにつれて、両側の長屋普請とすぐ知れる二階建の、その粗い格子戸から洩れる電燈に中のけしきが茫と写し出された。思いのほか奥行のない露地で、両側の長屋といっても二軒ずつおなじようなのが向い合ってわずかに四軒、それも米材の肌がいやに光る新築ではなくて軒端かたむくかと見えるほど黒ずんだ年代物。突き当りはあまり高くない石垣で上には何やら西洋館らしいのがそびえていたが、その石垣の真下にあるのが震災をまぬがれた土地柄だけに今日の東京にはめずらしい共同水道、雪達磨さながらすっぽり藁に包まれ水を吐く口と鍵をさしこむ耳だけが出ていようという古風な栓で、それがあるだけ道幅にゆとりができてはいるものの真中を走っている溝板は油断がならず、踏めばばちゃんと刎ねかえりそうな恰好であった。「いや、こりゃ風雅なお住居だな。この奥に妾宅

ありた気がつかねえ。ここへわれわれどてらのお客様が乗りこむんじゃ、浪人者さんすいなる身なりにて出で来りと、ト書が附かなきゃ納まらねえところだ。」

神楽坂裏の小料理屋からしゃべりあって来た調子がまだ抜けず、わたしがつい高声になるのを、仙吉はいつもの癖の急に小さい眼を狡猾そうにきょろきょろと廻したのであろう、色眼鏡をこちらへきらりと光らせながらおさえるような手つきをして「こーれ」というとともに、つつと露地の中へ歩き出したのにわたしも釣りこまれてはいって行くと、右側の奥の家、共同栓の横手に格子戸も台所の戸もならんでくっ附いた、その上り口をがらりとあければやっと足を踏みこめるほどの狭い三和土のつい鼻先が障子で、表の物音にそれと知ったのか、向うからひとの近づくけはいがしてその障子がさっとあき、「あら、いらっしゃい。」女にしてはややせいの高い、ぐにゃぐにゃしたからだつきの、ぷんと白粉のにおいをさせながら肩から乗り出したのが、仙吉の後にわたしをみとめると斜に身を引いて中腰になり、「あ、お客様。どうぞ。」仙吉の上るのをよけながら灯を背に障子の影になったので女の顔かたちは判らなかったが、その代りあけ放した家の中は一眼で見通され、壁一重で台所と仕切ってある上り口の二畳の、そのさきは六畳で、ここは外の作りとは打って変ってあかあかと電燈がかがやき、安物ながら長火鉢、ちゃぶ台茶箪笥などいずれも新調らしく、壁には三味線が二挺、部屋の片隅には小さい置炬燵にかけた友禅の蒲団の花模様が陽気に浮き出ていた。ただし、そのそばに縫いかけとおぼしくひろげられた反物はどうしたものか小紋のひどく渋い柄……と見る間に女は奥へ駆け入って、六畳の向うの障子をあけ、九尺ほどの縁側から天井をのぞくようにして、「かあちゃん、お客様よ、仙さんと、どなたかお友だ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

ちの方。」とたんに二階でみしみしという音といっしょに何かいらえが聞えて来たが、そのあいだに仙吉はもうするすると炬燵に膝を入れ、まだ上り口に立っていたわたしに「さあ、喬さん、寒いからこっちへ。なあに、ちっとも遠慮はいらねえよ。」

そもそもこの場の状況を述べるまえに、仙吉のような芸人とわたしのような不粋者と、異様な取合せの出来上るに至った由来から説きおこすのが順序とはいえ、その前置を述べ出した日にはちょっと一口ではかたづかぬ長ばなしとなろうし、またさしあたりそれにはふれずともすむ。しかしこの附合のはじまりは元来わたしの友だちの薩摩屋銀二郎が仙吉とは中学校以来の仲間であるという縁に由ったもので、じつはその銀二郎もやがてここにあらわれる段どりになるのだから、この間のいきさつは追ってのこととして、今わたしは部屋の中にはいりながら何となく世帯じみたにおいを感じて、「これはしんみりしてまた一味だな。」とことばに出すと、女はそれを世辞と取ったのか、あわてて針箱を隅へ押しやり、「まあ、とんでもない。狭いところで散らかっておりまして……」そこへ梯子をおりて来た母親らしいのが閾ぎわにぺったり坐ると東北訛の太い声で、「いらっしゃいまし。」男のようにがっしりした硬ぶとりの体を木綿著物の下に突っ張らせて、色白の肌理はこまかいが眼鼻だちのごつごつした、これはひどく田舎くさい五十女であった。「梅子に、おっかさんです。」と仙吉がちょっとあらたまって、「こちらはね、喬さん。かねてお噂をした詩人黒木喬先生。」詩人というのはわたしの渾名で、挨拶が一通りすむと仙吉はもう調子が崩れ、「ところで、さっそく酒だ。まだあるだろう、ゆうべのが。」「あら、そんなにないわよ。」と梅子もぞんざいになり、「二三合ぐらいじゃない、ねえ、かあちゃん。」「ああ、とてもた

りやしませんよ。買って来ましょうか。」「じゃ、すみませんがひとつ。」と仙吉はふところから紙入を出し、「ええ、まあ一升。それに何か餌を見つくろって。あとからもう一枚加わるんでね、銀さんが。」「あ、銀さん。」と梅子が、「こないだいらしった。」「ああ、薩銀、九時半にここに来るってえ約束なんだ。」「そう（茶簞笥の上の眼覚時計を見て）じゃ、まだちっと間があるわね。かあちゃん、風邪ひかないようにしてらっしゃいよ。つなぎに残ってるのつけましょうか。」

銅壺に徳利を突っこみちゃぶ台に小皿などならべる梅子を今わたしはゆっくり眺めることができた。二十を一つ二つ越したか、伏せた眼もとの愛嬌でしゃくれ顔の難をかくし、結いたての髪の重みに細い頸をしなわせている、それは何のたわいもない下町風の娘であった。先刻小料理屋でのはなしに仙吉が、「じつは今度ちょっとした足だまりを拵えてね。ああ、うちのほうへはもちろん内証なんだが、つまりわれわれのクラブ同様にしようってわけさ。みなさんにも遠慮なく利用してもらって、親類同様にどうぞ。銀さんにはこないだ紹介したんだが……」と切り出したのに、「菴主はさだめし」と水を向けると、「いや、それがね、そんな粋なんじゃないんだよ、ただおとなしいのが取柄で、それに……」と早くも調子に乗りかけたのを軽く聞き流して、女の素姓を深くもたずねずに来たのだが、こうして見たところ、およそ興味のもてぬ梅子であるうえに、総じて小ざかしい家庭の仕組が何より苦手のわたしとしてはちょっと質に取られたかたちで、やがてもどって来た母親のおしゃべりも上の空に銀二郎の駆附を待つばかりであった。

「銀さん、遅いわね。」「うん、さっき店からまわるっていってたが、ちかごろ、ひどくいそがしいそうだから。知らないかい、喬さん。」「何を。」「薩銀の店のことさ。」「いや。」「八丁堀さんも

だいぶ曲って来たそうじゃないか。おとっつぁんの病気以来やっぱりよくないらしいね。」「そんな噂は聞いちゃいるが。」「神戸の店は兄貴がしっかりものでいいそうだが、肝腎の本店がぐらついてちゃ、若檀那銀二郎ダンスばかりやってもいられねえだろう。」「なに、あいつは重宝な生れつきで、ダンスにも夢中になれるし商売にも夢中になれるし。」「こないだ、そういってらしたわ。あたらしい鑵詰の宣伝でおいそがしいんだって。とても景気のいいおはなしだったわ。」「そりゃ食料品じゃ古い店だから、すぐにお辞儀もしねえだろうが、さて銀二郎の鑵詰売、いつまでつづくかね。」と仙吉は伸びをしながら、「あんまり待たせると出かけちゃうぜ。」「お出かけって、これから。」「ああ、銀座へでもと思って。ねえ、喬さん。」出かけないまでも一応そういってみる手と、わたしは調子をかえて、「ときに、銀さんちかごろ大森へ帰らないそうじゃないか。」「へえ、アパートのほうへね。」「けさちょっと電話をかけてみたんだが、二三日お帰りになりませんなんだ。」「すると、あの子は。空閨を守ってるてえわけか。」「それが判らねえ。」

そのときぱかぱかと威勢のよい靴音とともに格子があき、「失敬、遅くなっちゃって。」とニッカーをはいた逞ましい脚で上り口から一またぎ、立ちかけた梅子を押しもどすように鼻先へ菓子折らしいのを突きつけながら、「梅ちゃん、こないだは。へえ、おみやげ。どうもいそがしくってね。」バンド附外套のふくれたのが障子いっぱいに立ちふさがったかと思うと、もう炬燵のそばにむずとあぐらをかいたのに、「いや、雲を起してあらわれやがったな。」と仙吉は気圧されぎみで、「まあ、そのいきおいで一杯。今噂をしてたところだ。」とさす猪口をやあと受ける相手の顔を見て、「なんだ、底がはいってるのか。どうりで。」「うん、すこし店を早く出過ぎたもんだから

ちょっと道草を食ってね。」「おいおい、われわれを待たしといて飲んでるやつはないだろう。」「いや、揚場町に寄って来たんだ。」「揚場に。」「ああ、お師匠さんのとこへ。」「あら、伯母のとこへ。」「ええ、こないだこちらの帰りに仙さんといっしょに伺いましてね、もうお眼見得がすんでるんです。そのせつ御馳走になったもんですから、ちょっとお礼に。」「まあ、わざわざ。」「ところがあべこべに一杯。お弟子さんに貰ったのがあるってんで。ついでに抜目なく御入門を願って、うろ覚えのあやしげなやつを浚っていただきましたよ。」「でも、伯母は風邪けだとか申してましたけど。」「ええ、若いほうのお師匠さんにね。」「あ、妙ちゃんに。」「すなわちお妙さんの三味線で、骨になるともなんのそのというやつを一くさり。」わたしは何とも口の出しようはなかったが、仙吉は露骨にいやな顔をして吐き出すように、「達者だなあ。」しかし斜に向いてしゃべっている銀二郎は気がつきもせず、「ぼくはこれでもね、梅ちゃん、下地があるんだから大したもんでしょう。むかし学校時代に仙さんといっしょにはじめたんです。ところがぼくは中途でやめる、仙さんは修業を積んでついに今日の大を成したという次第。この男も（と仙吉をさして）質屋の若檀那にしちゃ出来過ぎたもんです。前垂を取ると卯太夫さんのお師匠さんで、しかも当時は漂泊の詩人黒木喬の親友なんざ……」「漂泊とはなんだ、ぼくも目黒にれっきとした……」「いや、これは失言。ときにどうだ、ちかごろそのお住居のほうは。」わたしがこの質問をさりげなくそらそうとしたとき、おりよく仙吉が、「おい、銀さん、店がいそがしいもあんまりあてにゃならねえな。また清元をはじめるんじゃ、鑵詰のほうはどうなるんだ。」「なに、はじめるったって、ひまを見てときどき浚ってもらうぐらいのところさ。鑵詰は本業だ。目下宣伝に努めて

る。」「なにかい、宣伝は夜中でもやるのかい。」「え。」「かくしたってだめだよ。ちゃんとねたが上ってるんだ。当時どちらの方面です。どうして大森へお帰りにならねえんだ。」「そ、そんなことたない。もっとも店が遅くなったときにゃ、おやじのうちに泊るが。」「うそをつけ。」

八丁堀の店の裏が薩摩屋の住居になっていたが、銀二郎は以前からそこにはいず、画描きになると称してアパートにはいっていた。ボートも漕ぐセロも弾く唄の一つもという器用なたちで、中でも画は一番身を入れただけに多少恰好がつき、げんに先年わたしがはじめて逢ったときもひとが画学生として紹介したくらいで、今の大森の部屋にも絵具箱カンヴァスの類が取そろえてはあるものの、それは表向の口実、ありようは両親に知られたくない女と同棲しようとの魂胆で、ちかごろいっしょにいるのは京橋のLダンスホールに勤めているミドリと呼ぶちぢれ毛の小柄な娘であった。これはもと神戸の某ホールにいたのを去年義兄の店へ視察に行った銀二郎がふとした縁でつれて来たという当人のはなしであるが、わたしはしばらくミドリに逢う機会もなく、二人の仲がその後どうなっているか全然判らず、銀二郎がアパートをあけているということさえ今朝の電話で知った始末で、仙吉にしても何も知っているはずはない。しかし、ここにカマをかけられた銀二郎はあわてぎみで、「常談いっちゃいけねえ。ここんとこ、ひどく堅いんだ。ところで、あんまり遅くならないうちに引揚としようか、喬さん。」「うん。」茹だりかけていたわたしがさっそく腰を浮かすと、またも仙吉が、「じゃいっしょに出よう。まだ十二時にゃちょっと間がある。どっかへ行ってみようじゃないか。」夕方四谷の本宅にわたしが訪れたのをいいしおに、ついそこまでと丹前の上に外套を引っかけて飛び出した仙吉なのだが、おなじ恰好とはいいなが

らわたしとちがって洒落者の芸人がそのままの姿でカフェなどへ押し出そうとは思われず、よし出かけたにせよ細君のやかましい身がまたこの隠れ家にもどって泊るわけにも行くまいし、それに時間もないことなので、銀二郎とても相手の口先を真に受けるはずはなく、「なに、そいつはまたにしようじゃないか。まあゆっくりしてったらいいだろう。われわれと附きあってたらきりのねえはなしだ。じゃ、おやすみ、梅ちゃん、おっかさん。」もう靴をはいている銀二郎の後からわたしが立つと、上り口まで出て来た仙吉が、「じゃ喬さん、今夜は失礼。これからどうか遠慮なく。なに、ぼくがいなくったってかまわねえ。帰りが遅くなったときにゃ、叩き起して泊ってったらいいだろう。ああ、いいとも、女ふたりでさびしがってるんだから。」

外へ出ると急にむっつりした銀二郎が、それでも靴の歩調をわたしの足に合せながら一町ばかり黙ったままであったが、突然にがにがしそうに、「ふん、仙公あれがいつまでつづくか。今度のやつをいつもの伝で抛り出しちゃ、ほんとにかわいそうだぜ。あいつ、癖がよくねえからな。」「どうした。ひどく公憤を発してるじゃないか。」「なあに……ところで、これからちょっと附合わねえか。」「附合うって、どこへ行くんだ。」「まあ、いいだろう。いっしょに来てくれ。」そういいながら、銀二郎はもう手をあげて通りかかったタクシイを呼びとめていた。

## 二

ここまで書いて来たとき、わたしはびくりとしてペンを擱いた。もともと小説家めかしてこんなふうに書き出すとは柄にもないことといわれるまでもなく、かかる卑俗な断片を拾いあつめ綴

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com